

『神様とともにあるまち』

「次は～富士山駅～富士山駅～」

アナウンスが流れる。

車窓を流れる景色は、いつの間にか緑に包まれていた。

キラキラとした瞳で景色を眺めている。

いよいよ。いよいよ到着。

風水、開運が大好き。

そして、旅も大好きだ。

旅行は一人旅が好き。今回の開運旅は、「富士吉田」に決めた。

富士山駅のホームに降り立った瞬間、
きりっと冷たい空気に包まれた。

猛暑続きの都会とはまったく違う。

ジャケットが必要だ。ここにはすでに確かな秋の気配が漂っていた。

快晴の空。

真っ青な空に、うっすら雲がかかり、空がとても高く感じられる。

新しいのに木のぬくもりを大切にした趣のある駅のホーム。

まるでタイムスリップしたかのような少し懐かしい感覚。

改札を抜け、ロータリーへ数メートル歩いたところで、
ふと振り返り、驚いた。

「あ……駅舎に、鳥居がついてる」

近代的なビル仕様の駅舎の中央に、赤い鳥居があしらわれていた。

富士山駅に到着した人は誰も皆、この鳥居を潜（くぐ）って

富士吉田に立ち入ることになる。



地図を片手に、街を歩き始める。

通りに出て右折すると、早速、御師の宿が並ぶ街道が続いているらしい。

頬を撫でる風はひんやりと冷たいが、少し歩けば日差しに包まれ、ほんのり汗ばむ。

建物と空間のバランスがちょうどいい。

多すぎず、少なすぎず。

どこか懐かしい景色。

昭和の面影を残す店舗も点在している。

国道 137 号線を歩く。車の往来はあるが、ガードレールのない道でも、石造りの歩道がしっかりと整備され、安心して歩くことができる。

建物はほぼ二階建てまで。高いビルは見当たらない。

空は、ずっと広いままだ。

レトロで、どこか懐かしい日本の街並み。

けれど、どこからでも富士山が見える。

ほぼ、見える。

今日はラッキーなのだろうか。

都内からも、天気良ければ富士山は見える。

けれど、ここ富士吉田では、富士山が本当に近くて、大きい。

この街の人々は、毎日この富士山を眺めて暮らしている。
なんて贅沢なのだろう。

赤富士通り入口の「金鳥居」交差点を、国道 139 号線に向かって右折すると、
突然、巨大な鳥居が視界に飛び込んできた。

「……これが、金鳥居？」

青銅色の大きな鳥居の下を、当たり前のように車が行き交っている。
本来なら厳かなはずのその姿は、驚くほど自然に、まちの風景に溶け込んでいた。

「富士吉田の人は、毎日、あの鳥居をくぐって生活しているのね」

そう思った瞬間、ふいに声が弾む。

「あ……富士山が見える」

金鳥居の奥、その先に、富士山が姿を現していた。

鳥居の向こうに続くのは、富士山へと至る道。
鳥居越しに見る富士山は、どこか特別で、
このまちだけが知っている表情をしているように見えた。

神社に建てられる鳥居は、単なる門や目印ではない。
人が暮らす俗世と、神が宿る神域とを分かち、ひとつの境界。
不浄なものが内側へ入り込まないようにする「結界」としての役割も持つという。

富士山の神域の入口として、
『金鳥居』は、
重厚な存在感を放って立っていた。

思わず背筋が伸びる。
気持ちが、ずっと引き締まる。
それなのに、不思議と――
なにかとても、得をしたような気分になった。



美しく整った石のタイルの歩道を歩く。
ところどころに小さな案内板があり、
この街の歴史や成り立ちを、静かに教えてくれる。

金鳥居にも、説明書きが添えられていた。

金鳥居。
富士吉田における、富士山信仰の「入口」にあたる場所だという。

江戸時代中期、天明八年（一七八八年）。
富士山を目指す人々を迎えるため、
吉田口登山道の起点に建てられた一（いち）の鳥居。
かつては青銅―唐銅（からかね）で作られていたことから
「唐銅鳥居」と呼ばれ、
それがいつしか「金鳥居（かなどりい）」へと訛ったらしい。

二度の倒壊と、戦時中の金属供出を経て、
現在の鳥居は昭和三十一年に再建された。
コンクリート造りのその姿は、静かだが揺るぎない。

ここから先は、富士の神域。
人々が暮らす俗世と、信仰の世界とを分かち、
はっきりとした境界線だ。

金鳥居は、富士山へと向かう道の「門」として、
今も変わらず、旅人や信仰者を迎え入れている。

鳥居の下でふと足を止めた。
この一歩が、もう日常ではないのだと、
そんな気がした。

まっすぐ富士山へと続くこの街道も、
かつては左右に蛇行していた。
富士山の雪解け水による水害で流され、
このまちの景色は、今の姿へと変わった。

休火山である富士山の歴史には、
噴火だけでなく、その雪解けの水でさえも時に
大災害となりうる規模の力を秘めている。
その事実、改めて圧倒される。

この地は、雄大な富士山を
日々、特等席で眺められる場所であると同時に、
噴火や水害という脅威と隣り合わせに、
壮絶な歴史を歩んできた町でもある。

側溝の蓋の下を、轟音を立てて流れる水。
澄んだ水は清々しいが、
その勢いは、規模の大きさを暗示するほどの
エネルギーを秘めていた。

——富士山の雪解け水で、洪水。
噴火だけではない、もうひとつの脅威。

願いを込めて山に登る人々。
そして、その旅人を見守ってきた、このまち。
生活の安寧と、日々の幸せを。

人の力では制御できない大自然の力の前で、
人々は幾度も翻弄されてきた。
だからこそ、この地には、
祈りが根づいているのだ。



歩みを進めると、小さな道沿いに祀られた石碑が目にとまった。

「……なんだろう？ 岩？ 石？」

自然のままの石のようにも見える。

台座の上に石が置かれ、

よく見ると、小さな鳥居が添えられていた。

誰かが、丁寧に祀っている。

それだけは、はっきりと伝わってくる。

さらに歩くと、辻ごとにあるかのように、

同じような祀りが点在していることに気づいた。

「あ、ここにも」

「またあった……」

石そのものを祀ったもの。

「道祖神」と赤い文字が刻まれた石碑。

人の姿が彫られたものもある。

形はさまざまだが、不思議とどれも、

暮らしのすぐそばにあった。

——道祖神。

富士吉田市では、

道祖神は「サイノカミ」や「セエノカミ」とも呼ばれ、

村の境や道の辻に祀られてきた。
外から入り込む疫病や災いを防ぎ、
旅の安全や無病息災、
そして子孫繁栄を願う、身近な守り神だ。

一度その存在に気づいてしまうと、
富士吉田には祠や小さな鳥居が、あちこちにあることがわかる。
まるで、静かに見守られているような気がした。

小正月には、道祖神を祀る祭りが行われ、
地域によっては「セエノカミ」と呼ばれる御神木を立て、
一年の災いを祓い、
家族や村の安泰を願う。
火と結びついた祈りは、
今も、富士吉田の暮らしの中に息づいている。

富士吉田を歩けば、いつでも感じるができる。
富士吉田（このまち）では、神様は決して遠い存在ではない。
歩きながら、道の途中で、ふと立ち止まった場所に、
いつでも、そっと佇んでいる。

そして――
いつも、守ってくれている。



富士吉田は、神様がとても近い場所だ。
まちを歩きながら、その存在を自然と身近に感じる。

神社、鳥居、祠。
道端には、数えきれないほどの道祖神。

――護られている。

そんな感覚が、いつの間にか胸いっぱい広がっていく。

神社だけではない。

辻道に祀られた道祖神もまた、

このまちに暮らす人々を、

そして旅人である自分のことも、

そっと見守ってくれているように思えた。

顔を上げ小さく深呼吸すると、もう表情は、

安心と、かすかな希望に満ちている。

「今度は、誰かを連れてこよう」

この気持ちを、ぜひ体験してほしい。

今度は、自分が案内役になって。

